

〔駐村研究員だより〕

冷夏と猛暑

足立 康一

昨年と今年の天候は、まるで正反対。こんな変化は今までにあったでしょうか。この影響は、農業だけにとどまらず政治、経済ならびに我々の日々の生活等いろいろな分野に変化をもたらしました。

昨年の冷夏・長雨による「米」不足で緊急輸入が始まりそれに連動したのか、ウルグアイ・ラウンドの受け入れによる米の輸入自由化という大変革が始まろうとしています。変革と言っているのかどうか分かりませんが、今後日本農業の存亡に係わる大問題となっていくと思います。

過去、オレンジ、牛肉の自由化を受け入れていったわれわれ農村は、厳しいながらも精一杯の努力と研究をして経営を行っていますが、最後の砦であった米も自由化の道を歩き始めてしまいました。神の恵か、今年は打って変わって米の大豊作となりそうです。

天候に左右される農業・農産物の明暗がこの2年間に集約されているように思います。

農政も、米の自由化により大変革を迎えそうです。食管法の改正・農村の基盤の再構築が必要となってきました。高齢化、後継者不足が叫ばれて何年たったのでしょうか。私が30歳で農業を始めて10年たちましたが、わが町で、私の後に農業を始めた青年は2、3人です。専業農家から兼業農家になった人は、何人もいました。農業のむずかしさはなかなか他人へは伝わらないものですが、個人の努力だけではうまくはいきません。

ここで、鳥取県農業の昨年から今年にかけての様子を簡単に述べてみたいと思います。

まず特産の白ネギは、県西部の米子市を中心に栽培されています。昨年の冷夏・長雨によって生育不良、病害などが発生し収量が減少しましたが、箱単価が高く県全体で55億円の売上げとなりました。今年も、春ネギからまずまずの単価で推移しています。夏の猛暑・干ばつの影響で、生育の遅れ、腐敗病などが出ていますが、単価に助けられているという状態です。

県中部は、スイカの大産地です。大栄町、倉吉市を中心に約700ヘクタールで栽培されています。昨年は長雨のせいで単価が今一つでした。今年は、天候に助けられたと言うか、7月に入り高値安定の中、出荷が続けられ、大栄町農協では35億円という史上最高の売上げをあげました。昨年に比べ5億円の売上げアップと言う結果でした。

県特産の二十世紀梨は、昨年は冷夏・長雨の影響をもろに受けました。黒斑病の多発による収量の減と糖度不足による低価格のダブルパンチに見舞われ、最低の年となりました。県内では何十ヘクタールもが廃園となってしまいました。今年は、春から雨も少なく空梅雨、猛暑となり水不足。まともな雨は、8月下旬頃までほとんど降りませんでした。黒斑病は少々は出ましたが、昨年より減り、干ばつによる水不足が高糖度という結果をもたらしたため、過去最高の単価となり農家もほっと一安心というところです。

昨年と今年では、180度異なる天候でしたが、農業ならびにわれわれの生活に多くの反省をもたらしました。昨年から今年にかけて「米」の有り難さ「水」の有り難さを教えてくれました。多くの消費者の方々も、米や水の有り難さを分かってくれたのでしょうか。「のど元すざれば…」にならないようお願いしたいものです。

（鳥取県東伯郡赤碕町・農業）